

もくじ 高橋廣湖をめぐる新資料 1P 250年も続いてきた六部供養祭 2P
千住掃部宿の「旧書留」から⑩ 脇差と町人・百姓 4P

足立史談

第597号

2017年11月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(29-308)

千住ゆかりの日本画家

高橋廣湖をめぐる新資料

小林 優



高橋廣湖筆《大原女》絹本着色
明治時代後半
当館蔵（高橋廣湖ご遺族旧蔵）

十月三十一日(火)より、郷土博物館では、文化遺産調査企画展「高橋廣湖―千住に愛された日本画家―」を開催します。

当館では平成二十五年(二〇一三)、「幕末・明治の千住の美術―琳派と高橋廣湖―」を開催して、千住ゆかりの画家として高橋廣湖(一八七五～一九二二)を紹介しました。そして、この展覧会が契機となり、廣湖のご遺族より、同家に伝来した作品・資料の調査とご寄贈のお申し出を頂き、今回の企画展の開催へ繋がりました。これに合わせて、廣湖と千住とのつながりを改めて振り返り、合わせてこの調査で新たに

確認された作品をご紹介します。高橋廣湖は旧姓を浦田といい、明治八年(一八七五)、現在の熊本県山鹿市にあたる地で、絵師として画塾を営んでいた浦田長次郎の長男として生まれました。早くから父に画法を学んではじめ「天鹿」を名乗り、長じて熊本市の絵画研究所「共進舎」の教師に就きましたが、明治二十九年(一八九六)、男女合同劇の女優として熊本に巡業に来ていた高橋こう(一八五二～一九一三)に画力を認められ、翌年、その導きにより上京することとなりました。

この高橋こうは、幕末明治の新吉原で「今紫」の名で人気を博した元花魁で、以降も熱心に廣湖を支援しました。やがて廣湖はこの養子となつて高橋姓を名乗るに至ります。上京後、歴史画の大家である松本楓湖の内弟子となり、「廣湖」の号を授かつた廣湖は、「巽画会」や「紅児会」といった団体で研鑽を重ねる他、岡倉天心を中心とする日本美術院の研究会にも参加してその指導を受けました。そして、美術院と日本絵画協会の連合絵画共進会を舞台に入選を重ね、画壇にその名が知れ渡つたのです。岡倉天心からも実力を認められ、画壇の花形画家に上り

詰めていった廣湖ですが、その活動の後援となつていたのが、千住の旦那衆でした。上京後、廣湖の周りでは、早くから支援の輪が作られつつありましたが、千住でもまた明治三十年初頭には「芳廣会」という団体が旦那衆を中心に組織され、廣湖の活動を支援していたのです。この芳廣会については、廣湖の没時に出された巽画会の機関誌『多都美』第六卷第十二号(明治四十五年六月刊)での、廣湖の経歴回顧の中でも「尋ねて千住方面の有志も君の為に芳廣會なるものを組織し、直接間接に應援して今に至つた」と記録されており、廣湖の支援団体として知られるものとなつていました。その具体的な活動内容などは明らかではありませんが、同時期に千住の琳派絵師、村越向栄を囲む「千住光栄会」などを組織していたメンバーとほぼ同様であったと推測され、向栄に対してと同様に、共に書画を楽しみ、折々に日常生活で使用する掛軸や屏風などを依頼していたと考えられます。

こうして千住の人々と親交を重ねつつ、画壇で活躍した廣湖でしたが、明治四十五年(一九二二)、取材で赴いた朝鮮・満州旅行で猩紅熱に罹患し、帰国後、三十七歳の若さでこの世を去ることとなりました。

■ 門人との絆を伝える《大原女》

惜しくも早世した廣湖ですが、その作品は郷里の熊本県立美術館や、横浜の三溪記念館などに収められています。その中で、今回新たに確認されたのは、廣湖の長男、卯東の家系にあたる方のもとに伝来した作品・資料です。

この作品・資料群は大きく、廣湖自身の作品、廣湖の父長次郎(号：雪翁・雪長)や弟の四郎(号：湖月・廣香)など家族の作品、廣湖の門下に連なる人物の作品、そしてその他浦田家・高橋家にまつわる作品・資料に分けられます。その中には、没

したすぐ後に描かれた廣湖の油彩肖像画(作者：中村春洋)や、廣湖の門人である亀井琴仙が、大小様々な形の廣湖の落款印を捺して図様を形作った作品など、廣湖にまつわる貴重資料とも言うべきものも見られますが、伝来のエピソードと共に残ったものもあります。それが、高橋廣湖筆《大原女》(前頁画像)です。

《大原女》は、縦一九二センチ、幅五二・六センチの絵絹に描かれた軸装作品で、京都北郊の大原から洛中へ薪や農作物を売りに来る行商女性「大原女」の姿を淡く、柔らかな筆線と、枯淡な色調で描き出しています。ご遺族のもとに伝来した作品の多くは、描かれた後、そのまま廣湖の手元に残されていたものと見ら

れますが、この《大原女》は制作後、美術商の手に渡っており、それを戦後、門人の一人であった堅山南風(一八八七～一九八〇)が買い戻して、遺作の一点として遺族へと贈ったものと伝わっています。それを物語るように、本作には昭和三十七年(一九六二)の年記の入った東京美術倶楽部の鑑定書が付属しており、まさしく廣湖と門人との絆を物語る一作と言えるのです。

廣湖は、門人と親しい師弟関係を築いていました。明治四十二年(一九〇九)に入門した南風が生活に困窮していた折などは、自身が請け負っていた挿絵の仕事を手伝わせて生活の糧とさせるなど、その画家としての行く先だけでなく、生活をも慮っていたのです。南風が入門してわずか三年後に廣湖は没し、南風は新たに横山大観に師事して、鑑定書に記された昭和三十七年の頃には画壇の重鎮の一人となっていました。遺族へと贈った《大原女》は、自身を導いた師への報恩の形であったことでしょう。

今回の企画展にはこの他、千住で新たに確認された未公開の作品も出展されます。夭折の俊才画家、高橋廣湖の作品を、是非この機会にご覧ください。

(郷土博物館学芸員)

二五〇年も続いてきた六部供養祭

姫街道で行き倒れた本木の回国修行僧



行き倒れの回国修行僧 (経過)

どこの人だか分からないまま、行き倒れの修行僧を葬り、延々と二五〇年もの間「六部さま供養祭」を繰り返してきた人たちがいます。

ことの発端は昭和四八年、静岡県引佐郡三ヶ日町(現浜松市北区三ヶ日町)の郷土史家藤原安治郎さんからの紹介の手紙でした。巡り巡って足立史談会に届きました。

二百年も前から、当地で行き倒れた回国修行者を供養する祭りに浄財を拠出して、盆の八月十六日に歳々年々怠りなく行ってきたということ

です。その墓に刻まれた文字は「忠道円心信士・明和四亥年十二月廿九日・

武蔵国渚江領本木村□□□□円心回国修行者於当□□□□證□真言宗修行者於当□□□□證□真言宗相違□□

□」とあり、背負っていたガンの中に「子授観音様があり、近くの寺に安置されている。」ということ。『足立史談』六九号 昭和四八年)

さらに、『写真紀行・姫街道』(昭和五九年)という写真集にこの墓石の写真が紹介されていました。そこには円心の墓石に刻まれた文字が読み取れました。(『足立史談』二〇四号 昭和六〇年)

平成四年に、足立史談会は役員の研究会として三ヶ日町を訪問しました。その時はすでに墓石には覆いが設けられていました。静岡新聞がその模様を報じました。(『足立史談』二九八号 平成四年)

平成一九九年にも再度三ヶ日町を訪れ子授け観音を安置する高栖寺と、六部様の墓地にお参りをしてきました。

平成二四年には、郷土博物館で「足立の仏像」展が開催され、子授け観音」の写真も展示されました。

平成二五年、史談会の「史談大学」は特別講座として「忠道円心の子授け観音」を開催。仏像調査に当った真田尊光先生の報告、回国修行について安藤義雄氏、三ヶ日町の郷土を語る会の資料紹介を行いました。その日、三ヶ日町から藤田正夫氏が来館、懇談をしました。



今年の六部供養祭

今年、明和四年（一七六七年）

から数えて二五〇年目にあたります。足立史談会では六部様供養のお札の気持ちをこめて会員の皆様に募金の呼びかけを行いました。（同時に北九州豪雨禍への見舞いの義援金も呼びかけました。）なんとか供養祭に間に合うようにと、高栖寺と三ヶ日町の郷土を語る会の藤田正夫氏を介して募金をお届けしました。

三ヶ日町からの報告

高栖寺から礼状と写真が届きました。「南無子授観音・諸国巡礼六部様」というのぼり旗も新調されたという

ことでした。

供養祭を行ってきた三ヶ日町の一敷（いしき）集落の方からお便りを頂戴し、

「集落四九軒から五人ずつ輪番の当番でおこなっていること、案内書の作成配布、拠出金を募ること、当日は墓の草刈り清掃、祭壇の設置、しめ縄など斎場の諸準備、のぼりを立てる、御供物の用意、菓子袋の用意、飲み物の用意、寺への依頼、賽銭箱の用意等々．．」、あわせて写真もいただきました。

人の温もりは今も．．

通行手形通りの文字を刻んで葬むり、二五〇年も延々と供養祭を継続されてきたことに驚きもありますが、人々の温かさをしみじみと感じさせられます。

行き倒れはその地で処置するのが当時の習わし。川柳でも「死んだまま六部をおいてさかい論」、俺の方ではないと向う岸に竿で押しやることを皮肉っています。

立派な仏像を背負ったのは、恐らく農家の次三男なのでしょうが、旅をすること自体が命がけの時代。通行手形には「ご当地の仕来りで処理し、国元に知らせは無用」ということ。現代でも、墓石に刻まれた文字を訪ねて、埼玉県に問い合わせ、東京都に問い、ようやく足立にたどり着きました。

郷土史家が明らかにした人々の歴史です。

願わくば、子授観音と云う仏像の調査ができたなら、もっと明らかにすることがあるのではないかと思ったりしています。

三ヶ日町の方々に感謝しながら報告といたします。

（矢沢幸一郎）

『足立史談』三七九号（平成十一年）、『ブックレット足立風土記2』でも本木の六部様の紹介をしています。博物館の図録『足立の仏像』一四八頁で高栖寺と子育て観音が掲載されています。（編集）



円心の墓



高栖寺

千住掃部宿の「旧書留」から⑩ 脇差と町人・百姓

多田 文夫

江戸時代は武士以外武装していなかった、刀狩令で武装解除されたという理解がある。だが実態としては様々な武具が村や町にあったことが知られている。禁じられているのは、あくまで帯刀であり、脇差はもとより害獣駆除という名目で鉄砲もあつた。天和三（一六八三）年の幕令でも一尺八寸（約五四cm）までの中脇差が許容されていた。

今回紹介する資料（下段写真）は千住宿で名主が脇差を帯びることに ついて代官に提出した証文である。

【宿名主脇差証文】
（18丁裏）

差上申一札之事

御鷹匠様、御鳥見様、御役人様方江村々名主百姓町人共、御用二而罷出候節、脇差帯申間敷旨、被 仰付候処、千住宿之儀ハ百姓・町人御用二而罷出候節者、前々より脇差帯不申候、名主共儀ハ問屋場江も相詰、宿中御用二而、欠走候二も脇差帯不申候而ハ、
（19丁表）

馬差人足等二間違御見分無御座候而ハ、却而御用御差文二も罷成候二付、前々より脇差帯相勤来候間、脇差御免被遊候、

御成先罷出候節ハ、脇差帯シ申間敷候旨被 仰渡奉畏候、自今以後、弥以名主共之外百姓町人共之儀ハ、御用之節、軽キ御役人様之前ニアリ共、堅脇差帯させ申間敷候、名主共之儀ハ只今迄之通二相心得可申候、若相背候ハ、何様之曲事二も可被仰付候、為後日

（19丁裏）
証文差上申処如件、

千住宿	名主	藤左衛門
同	同	与 四 郎
同	同	庄 蔵
同	同	与五右衛門
同	同	九郎右衛門
同	同	庄左衛門
同	同	左左衛門
同	同	五右衛門

御代官所

■脇差を帯びる 前段では一般の百姓・町人は脇差を帯びることは無いが宿場御用をつとめる名主は脇差を帯びて出仕していたことが記されている。しかし脇差の着用が広まっていたらしく、後段であらためて幕府から將軍の御成り先で脇差を帯びることが禁止する触が出たことが記さ

れているが、ここでも「名主共之儀ハ只今迄之通」脇差を帯びるとして いる。こうして宿場御用、將軍の御成り先での対応で脇差を帯びることを確認しているのは、脇差が公的な場での名主身分の象徴と位置づけていたことを物語っている。

ところで他の宿役人や町の重役たちは、どうなのだろう。千住河原町稻荷神社が所蔵する文政五（一八二二）年の「釜鳴神事絵馬」にはずらりと千住河原町の町衆が描かれていて（平成二五・二〇一三年度特別展『大千住展』図録、十三頁）。いづれも直垂や袴を着用し脇差を帯びて描かれており、一般的に脇差が普及していたと思しい。

■身分呼称 この資料で興味深い記述がもう一つある。自分たちの身分呼称である。随所にある「町人」「百姓」の文言である。ここからは千住の人びとが自らの身分をどのように表現していたのかをうかがうことが出来る（なお「百姓」は「百姓」の別表記でしばしば見える）。現在、江戸時代の身分制は武士・町人・百姓の三身分とされるが、農村や江戸の出身者を数多く抱える千住の人びとを表わす表現として町人と百姓が用いられたのであろう。こうした身分表記にも町の特徴が現れている。

（郷土博物館学芸員）

